

鳥

Bブロック 全作品と講評



www.columnland.net/

にて作者さん&読者さんの声実況中

野鳥が楽しげに歌いました
 美しいものを歌いました
 かこの小鳥は歌えませんが
 美しいものを知らなくて

野鳥がひとつ歌いました
 美しいものを歌いました
 かこの小鳥は聴き入ります
 美しいものを知りたくて

野鳥が空を歌いました
 小鳥のそばで歌いました
 かこの小鳥は目を閉じます
 気高い空が見えました

野鳥が海を歌いました
 小鳥に向けて歌いました
 かこの小鳥は目を閉じます
 広大な海が見えました

野鳥が森を歌いました
 小鳥のために歌いました
 かこの小鳥は目を閉じます
 静かな森が見えました

野鳥が世界を歌いました
 そのすべてを歌いました
 かこの小鳥は目を閉じます
 小鳥は歌えませんでした

季節が巡り、年が過ぎ
 それでも小鳥は歌えませんが

美しいもの、
 見つけた

星が廻り、年が過ぎ、
 それでも小鳥は歌えませんが

野鳥が別れを歌いました
 その永遠を歌いました
 かこの小鳥が呟きます
 ずっと、一緒にいたかった

かこの小鳥が歌いました
 生まれて初めて歌いました
 老いた野鳥が呟きます
 ずっと、歌ってほしかった

かこの小鳥が歌いました
 野鳥の命を歌いました
 その尊さを歌いました
 その優しさを歌いました

その美しさを歌いました

温もり

青く澄みきった空を見上げる。

高々と手を伸ばしても、届きそうもない。

ふと、鳥が空を横切っていく。

昔、よく思っていた。

鳥になりたい、と。

翼があれば、風を切って、どこまでも飛んでいけるのに。

辛いことがあったら、この空を翔けて、どこまでも逃げられるのに。

だって空は、どこまでも自由で、果てしなく広いのだから。

「ねえパパ、なんで空を見ているの？」

一緒に公園に来ていた息子が、尋ねてくる。

「鳥を見ていたんだよ。」

「とりさんを？ どうして？」

「翼が欲しいなって思ってたね。どうして人には、翼がないんだろうね。」

「パパ、とりさんになりたいの？」

「だって空を飛べるんだぞ。気持ちいいだろうなあ。」

「へんなの。だってパパはとりさんになれないじゃん。」

どこか大人びている息子の笑い声が、辺りに響きわたる。

「ねえ、お腹すいたから、もう帰ろうよ。」

まだぼんやり空を眺めている私の手を、息子が引っ張ってくる。

「そうだね。きつとお母さんが、おいしいご飯を用意して待ってるよ。」

そう言って、息子の小さな手を握り返す。

昔、よく思っていた。

鳥になりたい、と。

けれど、今はそうは思わない。

翼はないから、自由に空は飛べないけれど。

この手があれば、人の温もりを感じることにはできるのだから。

二十一世紀末。資源の枯渇と度重なる戦争によつて人類が衰退の一途を辿る中、肩甲骨が異常発達するという奇病が発見された。

背中を内側からゆつくりと突き破り、外を求めて枝のように伸びてゆく。その痛みは尋常ではなく、同時に出てくる繊維の塊はまるで鳥の羽根。その姿はまさに、翼が生えているかのようだった。

医学では何一つ解明されず、宗教を信じない科学者達は皮肉を込めてこう名付けた。

【天使病】

「考え直してはもらえないんですね」

私の付き人が、足の下のコングリートのよう
に無機質な声で聞いてきた。

「ほら、またそんなことを言う」

いつもは無表情な彼の顔が一瞬曇る。私に協力していてもやはり、本当は嫌なのだろう。だって、彼は私のことが――

「もう決めたの。ていうかそろそろ時間よ、準備して。」

それでもやめることはできない。これは、私から私を奪った人たちへの復讐だから。

「……はい。ラフィル、貴女がそう望むなら」

彼はバッグを持って端まで行つた。ここからじゃその表情は見えない。今、彼は何を考えているのだろうか。

ふと時計を見る。十七時の五分前。

「いよいよね。これでやつと、私は……」

私も彼の隣に立つ。

少し怖い。でも。

「天使と呼ばれ、無条件に加護を求められた。

何か悪いことが起きると罵られた。時には悪魔だとさえ言われた」

天使病にかかるとはそういうことだ。

滅びゆく文明の中で人々に縋り付かれ、自分というものを奪われる。意思は認められず、ただ天使であることを強いられた。

用意された道は少ない。狂信者たちの信仰の対象となるか、科学者どものモルモットになるか、それか、自ら死ぬか。

「違う。私は天使なんかじゃない、空を飛ぶこともできない醜い鳥だ」

彼がバッグいっぱいに入っていた物を撒き散らした。

私の背中から出てきた羽根のような物。血に塗れて赤黒くなったそれは、私の痛みと苦しみの記憶だ。

数え切れないほどの羽根が空に舞い、ゆつくりと、私たちがいる廃棄された高層ビルの屋上から地上へ降っていく。

「……偽りの天使でもいいじゃないですか。貴女は貴女だ」

舞い散る羽根を見つめる彼の目は悲しそうな色をしていた。

「ごめんね、もう決めたの。……今日、救世主でなければならぬ天使はいなくなる。世界が私から全てを奪ったように、私は終わる世界から最後の希望を奪う」

予言では十二月二十五日、かつての神が生まれたとされる日に、私という天使によつて世界は救われるそう。

だから私はその前日である今日、礼拝の間である今、ここにいる。

天使に十二月二十五日は来ない。祈ることしかできない人たちがまさに祈っているその時、彼らは絶望を知るだろう。

ゴーン、ゴーン、ゴーン――

十七時。礼拝の時間を告げる鐘が鳴った。

「――行かないや」

最後だから、彼にとつておきの笑顔で微笑みかけてあげた。

躊躇ったら飛べなくなりそうだったから、その前に二百メートルの高さはあろう屋上から身を投げ出す。

ふわり、と、体が宙に浮かんた。

「ラフィル――！」

（ああもう、ばかだなあ……）

彼の表情は、辛そうで、苦しそうで。（最後くらい笑った顔が見たかったのに。……やっぱ私も、彼のことが好きだったのかな）

彼の伸ばした手が空を切る。その手を掴んでみようかとも思ったけど、間に合わなかった。

「さようなら」

赤い羽根に囲まれて小さく呟く。夕闇の中、私は垂直に落ちていった。

羽毛の生えた感情

九月一日

席替えて○○ちゃんが前の席になった
あの有名な

すぐく頭が悪くて

鳥みたいなのうみそしてると有名な

○○ちゃんだ

ボクの成績まで下がるような気かしていやだなあ

九月二十八日

緑の羽根が邪魔で黒板が見えなくなった

ボクは先生にいつけたけど

先生は

へんなことを言うんしゃありません、と

ボクを叱った

悲しかったから

帰り見たことない色の鳥に石を投げた

九月十一日

帰りの会で緑の羽根をもらった

いらなかったから

○○ちゃんの背中にはった

せんせん気がつかれなかった

なんとなく

笑った

九月二十九日

○○ちゃんの頭に大きなたんこぶがあった

十月八日

最近なんだか教科書を読むときに

ピーとかクエーとか言うんだけど、

誰も何にも言わない・・・

ボクが変なのかなあ

九月十四日

へんだ

○○ちゃんがまだ緑の羽根をつけてる

服は替わってるのに

なんてだろう

十月三十日

ボクは○○ちゃんについてに言った

「ふざけるのやめてよ！」

○○ちゃんは

その長いくちばしで

ボクをつついてどこかに行ってしまった

九月十八日

緑の羽根がおつきくなってるような気がする

夜

ボクはようやく気づいた

○○ちゃんは

きつとボクが好きかもしれない

きつとボクが好きなんだ

恋ってたぶんこういふことだと思ふ

「おい、鳥取！」

僕のサッカー部の顧問の先生は、とにかく、とにかく、とにかく怖い先生でした。僕たちサッカー部員は日々先生のことを気にしながらの毎日で、先生が右と言ったら右、左なら左、そんな感じです。

ある練習のときでした。フオーメーションの確認を先生がしているので、みんな輪になり話を聞いています。

「中村、お前はそこに立って。」すぐさま中村君は立ちます。

「川名から中村にボールがでる。それで、鳥取。お前はここ。」先生は鳥取を指しました。

が、手の方向にはあきらかに鳥取はいません。鳥取君は僕の隣にいます。それでも先生は説明を続けます。

「中村がトラップして：鳥取、お前ここだって言ってるだろ。」

指さす方向には赤澤君がいました。先生は赤澤君をにらんでいます。部員皆が焦っているのがわかりました。そう、完全なる人違い。

「おい、鳥取！」赤澤君はミスタービーン似のおめめパッチリ君なのですが、あの時ほど目が見開いていた時はありません。

「鳥取ここだよ、ここ！」

もういい、赤澤、お前は今日から鳥取だ。誰もがそう思いました。

当の赤澤君は手がユングラーみたいに挙動不審です。

先生はしびれを切らして赤澤君の腕をつかみポイントまで引つ張ります。

顔を見ながら「鳥取、鳥取……？」

僕は汗をふくふりをして笑いをこらえ、深呼吸するふりをして空を見上げます。鳥が飛んでいました。鳥じゃない、鳥じゃない、いい加減気づいて、と。

「おお、赤澤か。」

遅っ！！！

その日、先生が激怒することはなく、無事練習は終了しました。ただ、練習中、やたらとカラスが馬鹿にするように鳴いていたのは覚えています。

わづらい

真つ暗で何も見えない。自分が目を開けているのかさえ分からない。

動こうとしても自由に動けない。まるで足かせでも付けられているかのようだ。

この状況をどうにか打開しなくては行けない。

理性がそう訴えかけてきても感情がそれを拒絶する。

確かにこの状況はつらい。しかし、このままでも良いと思う。

だんだん頭も回転しなくなってきた、意地にも似た思いでこの場を離れたくなくなる。

もう長いこと自分はこうしている気がする。

昔はまるで大空を飛びまわる鳥のように自由で、束縛などされたこともなかった。

そんな風に昔を思い出してみても不思議なことにその頃に帰りたいとは思えない。

それどころか、今の自分の方が幸せにさえ思えてくる。

いつからこうなってしまったのだろう。

もしこの足かせが外れたら、自分が自分でなくなってしまうような気がする。

束縛されてこそ自分が世界に存在し、意義が生まれるように思える。

ただ、ずっと光が見えない生活はつらい。

ほんのわずかでも光が差し込めば生きていける。

あなたが見せてくれる光が差し込めば。

きつとあなたに恋した瞬間に僕のこの生活は始まった。

庭には二羽にわとりがいた。

2000ねん8がつ17にち

ぼくのいえにわとりが二羽きました。おかあさんが買ってきたついで、なまえはピーチとジョンです。

ぼくとおとうさんとおねえちゃんとはとってもかわいかりました。

でも、おかあさんはピーチとジョンがとってもだいすきなので、今日からおとうさんとおねえちゃんとぼくが好きなからあげは食べられなくなりました。とてもかなしいです。

2001ねん1がつ23にち

ピーチとジョンがいなくなりました。とてもかなしいです。でも、明日になったらかえってくるっておとうさんはいいました。

あと、今日はひさしぶりからあげが食べられました。とてもおいしかったです。

2001ねん1がつ26にち

おとうさんとおねえちゃんがかえってきませんでした。おかあさんは、明日になったらかえってくるって言ったけど、ふあんです。

あと、ピーチとジョンはかえってきません。かなしいです。

2001ねん4がつ19にち

ぼくとおかあさんだけになったので、さみしくないようにっておかあさんが犬を買ってきてくれました。かわいいです。なまえは、レノンにしました。

けど、レノンは庭でよくほえるので、うるさいです。

2009年6月12日

庭を掘り返してしまった。レノンが煩いからだ。見なければよかった。

どうしようころされるたすけてころさ

鳥

歩いているときふと感じる気配

憂鬱なとき

いつも鳥だ

・・・

テンション下がる・・・

歩いているときふと感じる気配

気分がいいとき

なんか珍しい鳥だったりする

・・・!

正直嬉しい

一番ほつとするのは

青空に浮かんでいる鳶を見ること

あの感動は何度見ても純粹で

自分も飛んでみたくなる

あの滑空はどれだけ気持がいいのだろうか？

ああ鳥になりたい

空、そして鳥

いつの時代も人の心を映し、人の憧れになっていたのだろうか？

今も昔も変わらない空、そして鳥

昔の人と未来の人と同じ気持ちになれる気がする

いやなれる

田村のペンギン

ある朝、目を覚ますと、田村くんは自分がペンギンになっていることに気付いた。こいつは滑稽だ。おれの脚はこんなに短かったのか。しかも見るからに不器用そうな手をしてるなあ。そんなことを思っていると、誰かが階段を上ってくる音がし、ノックもなく部屋のドアが開いた。母だった。どうやら彼を起こしに来たらしい。彼は言う。

「母さん、おれ、ペンギンだよ」

「あら、そう……。わかったわ、お父さんに相談しましょう」

母はそう言うて階段を下り、父を連れて戻ってきた。見ると、妹もいた。野次馬気分であつてきたらしい。父が言う。

「何を考えているんだ。ペンギンなど認めないぞ。考え直せ」

そう言われても困る。田村くんはもう自分の変化に気付いている。彼は言う。

「認めないって言われても、事実としてこうなってしまったんだから仕方ないだろう」彼の言葉を聞き直りと思つたのか、父は顔を紅潮させて怒り出した。母が父を宥める。

「お父さん、いいじゃありませんか。この子の好きなようにさせてあげれば……」

「何を言うんだ。ペンギンなんかにするために今までこいつを育ててきたんじゃない。それに私はこいつのためを思つて言っているんだ。こんな飛べない鳥に何ができる」

父と母が争い始めた。元凶である彼は、始めは申し訳なく思っていたが、次第に両親のやり取りにうんざりしてきた。窓の外をちらりと見る。青空が広がっているのが見えただ。彼の気持ちを察したのか、妹が言う。

「お兄ちゃんがやりたいようにすればいいじゃない。ペンギンに何ができるかなんて、やつてみなければわからないわよ」

彼と同様、外の世界に飛び出したことのない妹の無責任な立場からの発言に勇気を得て、両親の騒ぎをよそに、彼は窓を開ける。彼は妹に言った。

「実は飛べるんだ」

彼は飛び出す。空は家の中から見るほどきれいではなかった。冷たい風は身を切るし、灰色がかつた雲は視界をふさぐ。とはいえ落ちるわけにはいけないので、彼は飛ぶ。実は飛べるんだ。ペンギンだって落ちはしない。

彼は風に乗る。その気になればもつと高く飛べる。ずっと上の方には太陽がある。きつと父は、彼が高く上を目指して飛ぶことを望んでいた。だがおれはペンギンだ。それに気付いた田村くんは高く飛ぶことをやめ、広がる空に何かを見つけて空を泳ぐ。

ペンギンには、高い空より、広い海の方が合っているものだ。

人×鳥

鳥を見ると人は飛びたくなるらしい

だからスカイダイビングやらハングライダーやらパラグライダーや
らがはやっているんだろう

鳥を見ると人は旅をしたくなるらしい

だからあんな燃料費の高い飛行機なんかの需要があるんだろう

鳥を見ると人は癒されるらしい

だからバードウォッチングなんて趣味が存在するんだろう

人は鳥に魅了されてる

僕だって鳥になりたい、生まれ変わったらぜひ鳥として生まれない
そしたら自由に自在に存分に空を飛び回ろう

そうになったら僕は人の真似をしたくなるんだろうか？

古の法の下に

二〇五五年、未だ紛争のやまないアフリカ奥地で、希少金属のイリジウム、クロム、ゲルマニウムなどの鉱脈が次々に発見された。こうした鉱脈はアメリカ、オーストラリアなどの、『巨鳥』こと金属メジャーに搾取されること

が多かったが、軍事力をつけたアフリカ沿岸部の国々は金属メジャーに反発。AU(アフリカ連合)のもと主張した。一方、レアメタル・シンジケートの崩壊への危機感から、金属メジャーは軍を送りだした。そして、AUも軍を出して、とうとう戦争になった。メジャー側の身勝手な行動であつたことと、中東・アジアの紛争と時期が重なつたことで、メジャー側は、期待していた国家の軍の援助を受けられず、戦争は泥沼化していった。この戦争のちに言う第一次アフリカ金属戦争である。

中でも、メジャー側の空軍による侵入作戦が幾度となく繰り返されたが、すべて失敗し、入った戦闘機は二度と出られないとまで言われたコンゴ川上流部。ここは、戦闘機が鳥に例えられることから、『鳥の墓場』とさえ呼ばれていた。ジャングルの中のAU兵が携帯型熱誘導ミサイル『ステインガー』をもっていたのである。対抗すべく、メジャー側は軍事企業にレアメタルを大量に安価で提供することを約束。大型爆弾をもち、無数のデコイ(疑似目標)、フレアー(熱をもち、誤誘導させる)を積んだ光学迷彩搭載の超大型爆撃機『XB-II(フェニクス)』が投入された。

フェニクスの火力はすさまじく、一機のみながら、コンゴ川周辺は上流部の一部を除いて一カ月で焼き払われた。これにより、兵が熱レーダーで映るようになり、ステインガーの強襲ができなくなった。これ以上の被害が許されない状況になったAU軍は、空戦で決着をつけることにした。

二〇六五年十二月二十四日現地時刻二十三時、コンゴ川上流部で、空戦が行われた。空軍への予算をミサイルにまわしていたAU軍は、旧式の機体になった『イーグル』十機。メジャー側はフェニクスと、新型ステルス戦闘機XF A『ロック』三十機の大編隊『サンダーバード隊』。

「総員、発射！」戦闘開始後すぐ、サンダーバード隊の隊長の命令でロックからの長距離ミサイル『ガルダ』が次々発射された。この攻撃で、AUはエジプトの『グリプス隊』二機のみとなった。「おかしい…あいつら、ミサイルもないのか？」戦いのなか、グリプス隊はミサイルを一

つも積んでいなかったのである。しかも、二機を除いて、無人機だった。ある低度接近すると、二機は何かを放った。すると、突如ひどい電磁波が発生して、電子機器が一切使えなくなったのだ。「くそっ！ジャミングとは！どうりでミサイルがないはずだ！接近戦闘開始！」ミサイルが使えなくなり、機銃戦にもつれこんだ。すると、グリプス隊はサンダーバード隊の周囲を回りだした。「うわっ！張り付かれるー！」「ちー俺は味方だ、きじゅー！」「うわ、ぶっかー！」「レーダーから消え、暗闇のなか敵が見えなくなり、しかも無線も使用不可になりパニックになった。サンダーバード隊の隊員は、機銃を乱射した。同志討ちしたり、互いに衝突したりする、凄惨たる光景であつた。

「最新機がこのザマか…」五分後にレーダーが復帰した時にはロックは十機近く減っていた。すると、グリプス隊がレーダーから消えていた。不思議に思いサンダーバード隊の隊長があたりを見渡すと、下にはジャングルが広がっていた。「しまった…ジャングル地帯へと誘いだすことが本当の目的だったんだ。暗闇とパニックで気がつかなかった！フェニクス、早くフレアーをまいて…」しかし、ステインガーはすでに襲いかかったあとで、フレアーがまかれた時、サンダーバード隊の機体はすべて火球になっていた。「おい…フレアーをまいたら場所が…」フェニクスの乗員たちがレーダーを見ると、自らのもとにまっすぐ向かう二機があつた。「で、敵機、確認…」「くそっ、機銃で反撃しろ！」しかし、機動力で圧倒的に劣るフェニクスは十分後、三十基のエンジンすべて破壊された。「墜ちるのか？なぜだなぜ俺たちがああ…」グリプス隊は火につつまれて墜ちていく敵機を見て、「鳥の葬儀、鳥葬完了した。」と口にした。

後日、フェニクスは鳥の墓場で墜落していたのが確認され、メジャー側は手を引く決断を強いられた。

AUの勝利宣言の後、議長直々の特別表彰があつた。「グリプス隊、本当にありがとう。二人を中尉に任命します。中佐、同志討ちから始まるこの作戦、見事でした。大佐にします。」その後、大佐はこう、口にした。「はっ！ありがとうございます。いままでゲリラを雇い、同志討ちの混乱の中、アフリカの大地を荒らした者。それを同志討ちの混乱で、古の法の下、排除できました。——目には、目を。」

二〇六五年、それはアフリカの初めての勝利。そして、アフリカの『凶鳥』金属メジャー崩壊の始まりだった。

公園の白いベンチに群がるハト、僕は嫌いだ、

何故奴らは好かれるんだ？

奴らは何かをしたのだろうか？

野蛮な性格を僕は知っている、どこが平和の象徴なんだ？

大量発生しやがって、奴らは限度とゆうものを知らないのか？

僕は嫌いだ

僕は近くの石を取り奴らに投げつけてみる

奴らは僕をバカにするように軽々と青空に飛びたった

空から白い液体が降ってくる

そして

「べちゃり」僕の顔面に

奴らはなんの象徴なんだろう？

コンテスト結果

[Aの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
A01	とりあたま	2 pt	6 位	5 sp
		なあるほどもな思いつき。 凹んだときに、自分を応援するメッセージになりそう な。 トサカ・コスプレでもしてみましようか。 剽軽さがいい味わいの今週の表紙は、なんと注目度バ ツグンにて、最多特別賞に輝きました。おめでとう！ 特別賞：すべてを忘れま賞（短いのにかなり深い） はっぴー賞（共感できたから） 覚えていたいこともある で賞（前向きに生きよ？） にわとり賞（にわとりだ から。） 友達に相談しま賞（そんなに忘れたいような ことがあるなら友達に相談しようぜ！」 イチオシフレーズ：「もしも三歩歩いただけですべて を忘れられるならどんなに幸せなことだろうか」（全 文じゃん！）		
A02	鳥と島	2 pt	6 位	0 sp
		飄々とした語り口が、いい個性でした。正統派として 自説を熱くブツのではなくて、ちょっとゆるめのトー ク。でも、しっかり「教養」と「常識」というキー ワードを柱に構築してあります。 さいごのまとめが、もっとびしりと決まると良かった のですけれど。		
A03	翼ってそんなに 必要かね？	5 pt	5 位	3 sp
		翼とマイホーム、そんな究極の二択でご呈示いただき ました。 夢と現実、たぶんまだまだ夢見がちな読者層に、ユー モラスに冷や水という狙いが良かったです。 特別賞：久米田で賞（いちゃもんつけたー） 夢がない で賞（そのまんま） 共感できたで賞（言ってることが もっともだから） イチオシフレーズ：「マイホームが欲しいです。」× 2		
A04	少年と街角の夢	0 pt	11 位	1 sp
		木との会話。恋する少年。定番ながらロマンティック な展開でしっとり浸れます。 木がメインなのに「街角」ってどうよ、とか、少年の セリフが状況を説明しすぎて不自然とか、不満はあり ますが。 で、春ちゃんの正体は？ 木？？ 特別賞：心温まる（ハートフル）で賞（とてもハート フルな作品） イチオシフレーズ：「春ちゃんとうまくいっても」		
		7 pt	4 位	0 sp
		加護オチですか、なるほどね。憎い猫め！ ていねいに、しっかりストーリーを組み立ててであると		

A05	カゴの中の鳥	ころが好印象。 インコかな。鳥の種類や子供の名前といったディテールを埋めてゆくと、さらにストーリーが映えますよ。 イチオシフレーズ：「加護を失っていた」
A06	鳥類図鑑	37 pt1 位0 sp いろんなヴァリエーションで並べたアイディアも楽しいし、あやとりの学名が「Nobi nobita」なんて、こまかなつくりもブラボー。 さらにPR仕立てにして、盛り込みきれなかったコンテンツをチラ見せしたのもナイスアイディアでした。 「うっとり」を読みたい！ いやもう天井知らずの人気で37ポイント！9つの班が首位に選び、5つの班が2位に選んだ結果です。 イチオシフレーズ大賞ともども、グレートなゴールド・メダル、おめでとうっ!!! イチオシフレーズ：「寿命は他の種に比べて短く」「オレオレと鳴く」「撥音は死ぬときにしか発せられない」「これであなたもトリマスター！」「ケミストリー」「学名：Nobi nobita」
A07	親子の共演	1 pt9 位1 sp 親子丼。そんなそんなブラックな。お母さん、泣いちゃいそうです。 明るいブラック、ノリの良さが身上でしたね。 特別賞：いただきま賞（親子丼たべたくなった。） イチオシフレーズ：「いっただきまぁ〜す」
A08	祖父の日記	10 pt3 位0 sp 新米ヒヨッコ→連合軍のツバメ→孫世代の本物ツバメ。 鳥シンボルをじょうずに連鎖させつつ、3世代のストーリーをコンパクトにおさめていただきました。 「こんなにも空が狭いなんて」のフレーズも、すんと効いてのブロンズ・メダルでした、おめでとう！ イチオシフレーズ：「こんなにも空が狭いなんて」
A09	愛敬～深い思い遣り～	2 pt6 位2 sp 身を捨てて虎に我が身を食べさせる。お釈迦様でしたっけ。 助けられた本人は、そんなことはつゆ知らず。むしろ憎しみ全開で石を投げてる。 その落差がお説教っぽくなく描かれているところが個性として光っていました。 もうちょいコンパクトになる……ハズ。 特別賞：ファンタジー賞（現実的ではないけど面白い） 仏陀で賞（ミラクルバードだから）
A10	夢	0 pt11 位1 sp 空飛ぶ夢よ、もう一度。 前半は誰にでも経験ありそうな共感モード、ラストは未来志向。爽やか仕上げでまとめて好感度大でした。 特別賞：亜空間賞（亜空間の有効利用）
		1 pt9 位1 sp 立つ鳥跡を濁さずの宇宙版。 お引っ越し前の人類の、とっても折り目正しい「現状復帰」。

A11	終わる世界に	「後は野となれ山となれ」が、こんな意味に変換されるなんて♪ 軽妙なセリフに支えられて、壮大なスペースオペラの序幕のような、わくわく感でした。 特別賞：アフタヌーン賞（黄昏って感じかな？） イチオシフレーズ：「それでも故郷のことが頭から離れなかった」
A12	無題（折り鶴）	23 pt2 位0 sp 祈るしか、今の自分にできることはない。 神さま、どうか—— そんなせつない思いが、余白から、くっきり際立ってきます。 白く輝くシルバー・メダルが、とても良くお似合いの裏表紙でした。 イチオシフレーズ：「あの人がよくなりますように」

[Bの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
B01	美しいもの、見つけた	13 pt	3 位	0 sp また新しい境地へ、ということだったでしょうか、パン屋さん。 野鳥を通してしか世界を知り得ない、かごの鳥。そんな寓意なのかなと読みました。 きれいだけれど、何か透明すぎて。「優しさ」や「美しさ」といった抽象的な概念が、もう少し具体的でユニークな言葉に置き換わってゆくと、よりしっとり心にしみる叙情詩となるのでは。 もはやライバルは過去の自分？ 今回もまた強さ発揮でブロンズ・メダルです、おめでとう！
B02	温もり	6 pt	6 位	0 sp 翼なんかなくなたって、今のこのちいさな手のひらの温もりが何よりの宝物。 父と子と、手をつないでの帰り道はきっと夕焼け空ですね。 王道ながら、親子愛、照れずに（←ここ重要）描ききっていただきました。
B03	天使病	5 pt	7 位	2 sp そそられるネーミング。 なにその中2病？ みたいな設定はおもしろいのに、ラフィルの悲しみが、あんまり伝わってきません。むりやり教祖に祭り上げられたり、好きな人にすなおになれなかったり、苦しみがもっともっとあるはずなのに。 特別賞：長いDe賞（長い） 中二で賞（中二臭がするから）
B04	羽毛の生えた感情	0 pt	10 位	2 sp いいなあ、これ。わけわからんけれど、そこが。だってどうせ恋なんて、わけわからんものだもの。 とんでも勘違い君と、天然緑の羽根子ちゃん、さあてこの行く末は？ 特別賞：意味深で賞（結局どういう内容？） ウブで賞（恋でこんなに語っているから） イチオシフレーズ：「恋ってたぶんこういうことだと思う」
		13 pt	3 位	1 sp

B05	「おい、鳥取！」	部活の一光景。何でもない日常のできごとをここまで冷静沈着に描ききったのがグッジョブ。その「引き」視線のおかげで、その場のビミョーな空気がしっかり伝わってきます。 地味にうまいなあ。やっぱり実体験は強い。しっかり言葉が伝わってきます。おめでとうブロンズ・メダル&イチオシフリーズ大賞!! 特別賞：健忘賞（人の名前、間違っているから） イチオシフリーズ：「ユンゲラーみたいに挙動不審です。」×4「おお、赤澤か。」×2「ミスタービーン似のおめめパッチリ君」
B06	わずらい	3 pt 9 位 0 sp 縛られるのが、うれしいの☆ だんだんと真相が見えてくる運びに、なるほど恋わずらいかと納得。 「あなた」の魅力が少しだけでも描かれていると、より感情移入できそうですが。
B07	庭には二羽にわとりがいた.	8 pt 5 位 1 sp グエエエ。かわいらしさに安心させといて、いきなりそんな。 それにしても、なぜに二羽ずつ、二人ずつセットでいなくなるのでしょうか、「庭」だから?? 特別賞：怖いで賞（怖い） イチオシフリーズ：「どうしようころされるたすけてころされ」「2009年6月12日」
B08	鳥	0 pt 10 位 0 sp さいごの「いやなれる」で、ぐっと気持ちが上向きになるところがグッド。 でもなぜカラスだと凹んで、トビだと上がるのか、そこまで考察が届くと良かった。 イチオシフリーズ：「ああ鳥になりたい」
B09	田村のペンギン	23 pt 1 位 2 sp 「実は飛べるんだ」 がんばれ田村君。これから始まる冒険ストーリーといった趣ですね。とぼけたやりとりにハマりました。圧勝のゴールド・メダルでしたね、おめでとう!! 特別賞：田村賞（名前がべただ）空を飛びま賞（結局飛ばないんかいっ!!） イチオシフリーズ：「母さん、おれペンギンだよ」「ペンギンなど認めないぞ.考え直せ」
B10	人×鳥	0 pt 10 位 0 sp 自分にはないものだから欲しくなる.その真理をラスト1行にぴしりと打ち込んでインパクト大です。 ただ、形式はもっと整えたほうが良さそうです。それだけで印象がまるで違って来るハズ。
B11	古の法の下に	5 pt 7 位 6 sp うう、詰め込みすぎですってば。ノって書いてるのは分かるけど。 空戦描写の後半が盛り上がるので、前半をスリム化してそこだけしっかりクローズアップしたい。でも、この長々しさが最多特別賞を呼び込みましたね、おめでとう！ 特別賞：金属賞（イリジウム）5類賞（5類からの支持）ガンバッタで賞（長く凝った文章を書いたこと。僕らが長い文章を読んだこと）肩コリ賞（文章は凝っているけど、読みにくくて肩もこる。）誕生日で賞（委員長が11

		日生まれだから) ガンバッタで賞 (長いから)
		14 pt2 位1 sp
B12	象徴	たしかにハトって我が物顔すぎかもね。 こちらの「嫌い」という気持ちを読み取ってのカウン ター攻撃だったの、かも。 でもほら、先に手を出したものの負けだから!? 日常の一コマ、いかにもありそうな、と共感を誘いつ つ、社会派テイストもほんのり。そんなところが評価さ れてのシルバー・メダルでした、おめでとう!! 特別賞：身近で賞 イチオシフレーズ：「べちゃり」「奴らはなんの象徴な んだろう？」